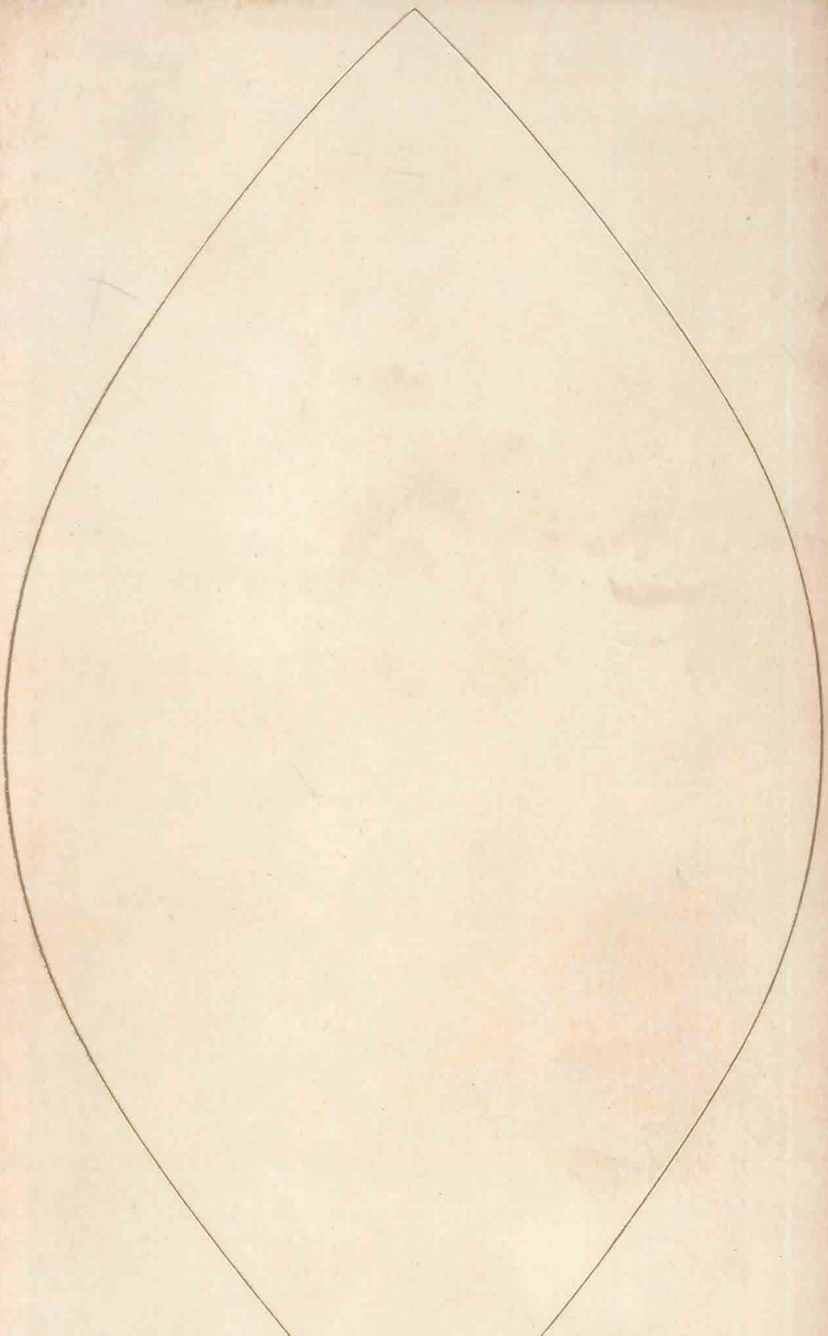
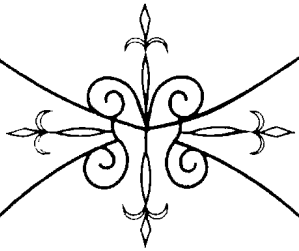


# 三島由紀夫全集



## 15

小　　説

XV

監修／石川淳　川端康成　中村光夫　武田泰淳
編纂／佐伯彰一　ドナルド・キーン　村松剛　田中美代子

新　潮　社

三島由紀夫全集第十五巻

昭和四十九年七月二十日印刷
昭和四十九年七月二十五日発行

著者三島由紀夫
発行者佐藤亮一
装幀者杉山寧

発行所株式会社新潮社
〒162東京都新宿区矢来町七一　振替東京八〇八
電話業務部(〇三)二六六-五一一一　編集部二六六-五四一一
定価二五〇〇円　乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします
第十五回配本（全35巻・補巻1）

Copyright © 1974 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

# 三島由紀夫全集　第十五巻　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

自動車……七
肉體の學校……二九
可哀さうなパパ……二六一
複雜な彼……二八七
解題……六一七
校訂……六一九

# 三島由紀夫全集　第十五巻　小説(15)

# 自動車

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 1

そこへ行つてみて、蝶ネクタイをして、コールマン髭を生やし、金縁眼鏡にパナマ帽、サマー・ウーステッドの上着を腕に抱へた男なんかは、自分以外に誰一人ゐないことに、九鬼は今さらおどろきはしなかつた。

見わたすかぎり、夏のシャツの若者ばかりである。それが暗い厩のやうな歩廊いつぱいにざわめいてゐる。

歩廊の左側は古い木造の事務所に接し、右側は腰板だけで、七月の午前十一時の日光をまばゆく反射したアスファルトの庭へつながつてゐる。

海はすぐ庭の外れなので、潮の匂ひがする。それにもまして、近くの屠殺場や汚水處理場の匂ひが、古い柱のペンキの剝がれた木肌にまで、しみ込んでゐさうに思はれる。

これが鮫洲の自動車試驗場の眺めであつた。

九鬼はをととひ教習所を卒業して、今日ここへ學科試驗を受けに來たのであるが、十一時まで

に申込の手續をすませると、試驗開始まで二時間の暇があいてしまつた。ふだんかういふ暇を持ち馴れない九鬼には、この二時間が大そう新鮮に感じられた。

何もかもゆつくりやらうと九鬼は思つた。一本の煙草を喫むにも、シガレット・ケースをゆつくりとあけ、ゆつくりと一本とりだし、ゆつくりと口にくはへ、ゆつくりとライターをさぐり……。

しかし目前の若者たちが、これからの二時間へ立ち向ふ態度は、九鬼とはまるでちがつてゐた。彼らは待たされることには馴れてゐたし、第一、ふだんから暇がありすぎた。彼らは細身のズボンの姿で、ひどく宙ぶらりんで、誰からも大して熱狂的に待たれてはゐなかつた。

そして潮風は歩廊へ來てふくらんで、お互ひに不機嫌な、蔑みに似た眼差を投げ合つてゐる彼らの足もとを吹き拔けた。

かういふ連中と同一の條件で扱はれることの面白さが、四十七歳の九鬼の心をくすぐり、自分を若いと想像することはもうできなくても、せめてあのころの、水や日光や空氣のやうに豐富にあつた時間の感覺を、もう一度心の裡によみがへらせたいと思つた。

今日彼は會社を休んでゐた。今日一日は、電話や來客や會食とも緣切りである。むかしの學生時代のやうに、時間がどこまでも無限につづいてゐて、そのあひだに氣の重い試驗はあるけれど、あとは自分の足の向くままにどこへでも行ける。

しかし、俺は學生時代に本當にそんなに自由だつたかしら、と九鬼は考へた。第一、お金がなかつた。そして、外側から縛られてゐなくても、內側から縛られてゐた。內側から、自分の無智

に縛られてゐた。……いろんな、つまらない、不合理な考へを、ごみ箱のやうにいつぱい詰め込んでゐた。死にたいと思つたり、（ああ、今はこんなに肥つたお腹で、死にたいと思つたりすることは、金輪際できない）、生きたいと思つたり、（一體、生きるといふことはどんなすばらしいことだと思つてゐたのか）、世界中で自分を一等重要だと思つたり、（しかし誰も彼に注意を拂つてはくれなかつた）、世界中で自分を一等つまらない人間だと思つたり、（しかも誰も彼に注意を拂つてはくれなかつた）、外國へ行つてみたいと思つたりしてゐた。戰後彼は商用で十二回アメリカへ行き、四回世界一周をした。どこでも自分と同じやうな人間に會つたきりだつた。

ただ時間だけは、使ひきれないほど豐富にあつた。それを誰にも分けてやらずに、自分一人で無駄使ひをする。それが、それだけが、もしかすると若さといふものかもしれない。

……。

一人の少女が歩いてきて、九鬼にぶつかつた。交通法令教本にあんまり熱心に首をつつこんだまま歩いてきたからである。

「あら、ごめんなさい」

と九鬼を見上げた顔を見て、

「やあ」

と九鬼は言つた。名前は知らないが、教習所での顔見知りで、をととひ一緒に卒業した仲である。

「勉強家ですね」

「だつてとても憶えきれないんですもの」

かういふ出會は、一足飛びの親密さを呼び起すものだ。まはりが知らない人ばかりなので、ほんの僅かな知己が、俄かに同志のやうな間柄に高まつてくる。もともと親しさとは、相對的な濃度の問題である。

少女と言つても、免許證の法定の十八歳以上であることは確かである。ひよつとすると、二十歳を超えてゐるかもしれない。しかし背丈も低く、體つきや顏つきにいちじるしく未成なところがある。

美しくないといふのではない。髪を昔風のお下げにして、いたいたしいほど大きな目が、ほかのささやかな造作に比して、露出的な感じがするほどで、しかも長い睫がその緣をかがつてゐる。唇はあてどない表情をうかべてゐて、少し白つぽい流行の口紅をつけてゐるのに、それがちつともふてぶてしい感じにならない。

さういふ顏つきと不似合に、彼女は大人びた、いはば奧樣風な、黃いろい袖なしのタイトなワン・ピースを着て、その腕や胸の感じは、固さはないけれど、ふくよかさもない、萱の穗先を拔いた白い芯のやうな水つぽいなまなましさを持つてゐた。

『夏だといふのに、この子はちつとも日に灼けてゐない』

と九鬼は思つた。その上、九鬼は、咄嗟の間にこの娘の着てゐる物や、持ち物から、さらに、かなりの費用を拂つて敎習所を卒業したといふことだけは少くとも明らかなその經歷から、

『この子なら危險はあるまい』

といふ目安をつけた。きつと中流の家庭の娘で、あんまり男も知らない學生だらう。用心ぶかい九鬼は、何かにつけて後腹の病みさうな女をむやみに怖れて、さういふタイプを識別する目を日頃から養つてゐるつもりであつた。

「どう、お茶でも飲みに行きませんか。あと二時間、ここでぶらぶらしてゐても仕方がない」

「さう？」

それだけで少女はついてきた。

鮫洲試驗場の前には、ゆきかふ車がしやつくりをするやうな動きを見せるデコボコ道を隔てて、大きな自動車教習所があつた。九鬼は人にきいてゐた喫茶店へ少女を案内するために、教習所のわきの、轍に波打つた乾いた土の道へ入つた。汚い長屋や、勞働者むきの一膳飯屋が並んでゐた。夏の日は直下に照りつけて、あたりの町の妙に歪んで疲弊した感じを、まざまざとさらけ出してゐた。網の塀越しにみえる教習所の庭は、丁度早い晝休みに入つてをり、鴇いろのヒルマンが十數臺、じつと居靜まつて、車内の座席をオーヴンの内部のやうに灼いてゐた。

教習所の裏へ出ると、バラックの小店が二三、店先に問題集や、免許證入れや、安物のサングラスをぞんざいに並べ、店の一角には机を置いて、代書屋の看板を立ててゐた。

「ここらの代書屋へ、おんなじお客で、二十六ぺん來た人があるさうだ」

「どうして？」

「つまり二十六ぺん試驗に落ちたんですよ」

「あら、いやだ。縁起のわるいこと聞いちやつた」
と少女は、その上今朝讀んだ週刊誌の占ひで、意氣沮喪してゐたところだと打明け、携へた法令教本の黄いろい表紙へ、神經質に指を觸れた。
こんな一劃にめづらしい冷房つきの喫茶店は、代書屋の二三軒さきにあつた。奥の暗いボックスに坐つて、二人前のサンドウィッチとコーヒーを注文する。運ばれてきたコーヒーの皿には、まだモーニング・サーヴィスの時間内で、たのみもしないのに、茹卵が一ヶづつ鎮座してゐる。
椅子に坐るとから、少女はもう、目を半分しか上げなくなり、半分は膝にひらいた法令教本から離れなくなつた。
『車両等の運轉者は、車両等を運轉するときは、前各項のほか、次の各號に掲げる事項を守らなければならない。
……二、目が見えない者若しくは耳がきこえない者が白色に塗つた杖を携へて通行してゐるとき、一時停止し、又は徐行して、その通行又は歩行を妨げないやうにすること』
「いやだわ、赤い杖つて書いてあつたら、まちがひなんだわね。ワナに引つかけるみたいな問題ばつかり出るつていふから」
などと、その教本の頁を追つてゐない九鬼にはわかりかねる獨り言を、そそくさとした口調で言つたりした。
折角退屈しのぎに連れて來たのに、九鬼は一時間以上も、沈默のお相手をさせられる羽目になつた。少女は教本に首をつつこんだきり、サンドウィッチも手探りで喰べる始末であつた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com